

## 平成28年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成28年4月～平成29年3月

### 1. 学校概要

学校名 北九州市立すがお小学校

種 別  保育園・幼稚園     小学校     小中一貫教育  
 中学校     中高一貫教育     高等学校  
 教員養成     技術/職業教育  
 特別支援学校     その他（                    ）

所在地 〒803-0264  
福岡県北九州市小倉南区山本393-6

E-mail sugao-e@kita9.ed.jp

Website http://www.kita9.ed.jp/sugao-e/

児童生徒数 男子 36名    女子 44名    合計 80名  
児童・生徒の年齢 7歳～12歳

### 2. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか（ 郷土、福祉 ）

### 3. 活動内容

#### (1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

環境を視점에郷土・福祉・平和・国際理解とのかかわり、つながりを重視した未来志向型ふるさと活動と、環境にやさしい無農薬農業で、勤労及び食育とのかかわり・つながりを重視した特産創生型ふるさと活動を推進している。1年間の主な活動は、以下のとおりである。

#### ◆ 未来志向型ふるさと活動（環境を視점에、郷土・福祉・平和・国際理解とのかかわり、つながり）

##### ○ 全校：紫川清掃

- ・ 全校児童で、学校そばの紫川において、ゴミ拾い、清掃美化活動を行う。

##### ○ 全校：いかだ遊び集会、及びカヌー体験

- ・ 自分たちがきれいにした学校のそばの紫川でいかだ遊びをしたり、カヌー体験をしたりして、身近な紫川にふれあい、かかわりながら慣れ親しんでいく。

##### ○ 1年生：生活科「たのしさいっぱい すがおのしぜん」

- ・ まちたんけんに出かけ、季節ごとのすがおの自然とふれあう。

##### ○ 2年生：生活科「もっと発見！すがおのじまん」

- ・ まちたんけんに出かけ、地域の人とかわりながら仕事や生活の様子についての気づきの質を高める。

##### ○ 3年生：総合的な学習の時間「ふるさとすがお新聞社」

- ・ 地域取材に出かけ、地域の史跡、自然など「ひと・もの・こと」とのかかわり・つながりながら、地域の一員としての自覚をもつ。

##### ○ 4年生：総合的な学習の時間「広げよう！ふれ愛の輪」

- ・ キッズ保育士・キッズ介護士として、福祉・キャリアの視点で地域の保育園児や年長者と交流する。

##### ○ 5年生：総合的な学習の時間「未来につなごう！紫川」

- ・ 学校のそばを流れる紫川の水質調査や水中生物調査、地域の方への聞き取り調査などを行い、ふるさとの川を未来に守りつなげようとする気持ちを高める。

##### ○ 6年生：総合的な学習の時間「すがお平和都市宣言」

- ・ 「戦争は、最大の環境破壊」であることを、平和・国際理解の視点から調べる。

#### ◆ 特産創生型ふるさと活動（環境にやさしい無農薬農業〈勤労及び食育〉とのかかわり・つながり）

##### ○ 1, 2年生：生活科「ようこそ！すがお小麦ワールドへ」

- ・ 地域の方に学びながら、小麦を栽培、収穫し、「ふるさとふれあい収穫祭」での団子を作ったり、小麦料理にしたりして食する。

##### ○ 3年生：総合的な学習の時間「名物にしよう！すがおの大豆 大変身」

- ・ 地域の方に学びながら、大豆を栽培、収穫し、味噌や豆腐をつくる。味噌は翌年の「ふるさとふれあい収穫祭」で団子汁として振る舞う。

##### ○ 4年生：総合的な学習の時間「つくろう！高菜漬け」

- ・ 地域の方に学びながら、高菜を栽培、収穫し、地域の漬物名人と一緒に高菜漬けをつくる。

##### ○ 5年生：総合的な学習の時間「挑戦！竹炭米」

- ・ 地域の方に学びながら、育苗、田植え、稲刈り、脱穀という米作りに取り組む。

##### ○ 6年生：総合的な学習の時間「たくあんづくりで届けよう！復興のエールを」

- ・ 地域の方に学びながら、大根を栽培、収穫し、地域の漬物名人と一緒にたくあんをつくる。

##### ○ 全校：学校行事「ふるさとふれあい収穫祭」

- ・ 5年生の米と各学年毎に栽培した秋野菜、3年生の味噌を使ってご飯と団子汁をつくり、保護者や地域の方などを招待して地域交流する。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（

）

**地域に学び、大地と触れ合い、伝統の継承と感謝の心の育成を図る地産地消の農園活動**

北九州市立すがお小学校 主幹教諭 吉田安孝

1 テーマ設定の理由

本校区は、山に囲まれた谷地区にあり、北九州市を代表する紫川が流れ、周りには田畑が広がっている。まさに日本のふるさとの原風景である。そして、大葉春菊や枝豆など、本市における特産物を生産するブランド農家や、もやし工場などが存在し、農作物も地域の特産として位置付けられている。このような自然豊かな土地を守ろうと、地域の方は、紫川の浄化活動や地域行事を積極的に行ったり、漬物作りやしめ縄作りなど、伝統文化の継承に努めたりしている。また、学校教育への期待も大きく、児童の登下校の見守りをはじめ、学校の教育活動に進んで協力してくださっている。

このような校区の実態から、地域の「ひと・もの・こと」へのかかわり・つながりを大切にした教育活動を展開し、児童に地域への愛着と誇りを胸に、やる気と自信をもたせ、よりよい未来を築いていこうとする気持ちを高めることは、本校教育の使命だと考える。

2 ねらい

地域に根ざした体験型学習として、無農薬農法による地産地消の農園活動を推進し、地域に学びながら大地と触れ合い、伝統の継承と、大地の恵みや地域の方への感謝の心を育成し、自らの生活の在り方を追究していく。このことで、持続可能な社会の構築に向かう実践力を高めることができるようにする。

3 本校教育活動への位置付け

本校の生活科、総合的な学習の時間、及び特別活動におけるカリキュラムには、地産地消の農園活動を明確に位置付けている。それは、以下のとおりである。

本校カリキュラムに位置付けた地産地消の農園活動		(資料1)											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	3きれいにさいてね たくさんさいてね(春)(10) → 3きれいにさいてね たくさんさいてね(秋)(5) → 7ようこそ! すがお小麦ワールドへ(10) 麦まき(2年生への継続単元) 【夏野菜(きゅうり・なす・ミニトマト・オクラ・とうもろこし等) → 冬野菜 → 芋掘り集会 → ふるさとふれあい収穫祭(だいこん・みずな・にんじん)】												
		計25											
2年	4ようこそ! すがお小麦ワールドへ(9) → 小麦粉ひき → 食品づくり(うどん、団子等) 3おいしくぞだてわたしのやさい(6) → 冬野菜 → 芋掘り集会 → ふるさとふれあい収穫祭 【夏野菜(きゅうり・なす・トマト・ししとう・オクラ等) → (だいこん・はくさい・しゅんぎく)】												
		計15											
3年	「名物にしよう! すがおの大豆 大変身」(42) 大豆植え → 大豆収穫 → 調理(黄粉、味噌、豆腐づくり) 【夏野菜(2) → 冬野菜(2) → 芋掘り集会(1) → ふるさとふれあい収穫祭(2)】												
		計49											
4年	「つくろろう! 高菜漬け」(3) 高菜植え → 高菜漬け 【夏野菜(2) → 冬野菜(2) → 芋掘り集会(1) → ふるさとふれあい収穫祭(2)】												
		計10											
5年	「挑戦! 竹炭米」(7) 田植え → 稲刈り → しめ縄づくり 【夏野菜(2) → 冬野菜(2) → 芋掘り集会(1) → ふるさとふれあい収穫祭(2)】												
		計14											
6年	「たくあんづくりで届けよう! 復興のエールを」(30) 大根植え → 大根収穫 → たくあんづくり 【夏野菜(2) → 冬野菜 → 芋掘り集会(1) → ふるさとふれあい収穫祭(2)】												
		計35											

このカリキュラムに基づき、年間を通じた農園活動を充実させている。その実際を以下に述べる。



#### 4 農園活動の実際

##### (1) 5、6年生による農園整備（4月）

本校では、毎年4月当初に5、6年生による農園整備を行っている。これは、児童が、作物栽培には土作りが重要であることを理解し、愛着をもって1年間の農園活動を進めていくことができるようにするためである。

児童には、天地返しのための鍬の使い方や土作りのための苦土石灰や堆肥まき、雑草よけのためのマルチ張りを指導し、作業に当た



らせた。これらの作業を通して、児童は耕し作業の大変さやマルチ張りの有効性を学び、活動後には「今は機械があるけれど、昔は広い畑を手作業で行っていたのだから、すごいな。」や「昔は雑草よけにマルチを張ることはなかったはずだから、除草作業は大変だっただろうな。」などと、実感を伴った感想を述べていた。

##### (2) 全校児童による夏野菜植え（5月）、冬野菜植え（9月）

農園整備が終わると、児童一人一人が自分の育てる夏野菜を決めて苗植えと栽培を行う。この活動では、各自に責任をもたせて栽培と収穫をさせることで、地産地消の意義を感得させるようにする。

また、水やりを怠れば枯れてしまうという命の学習にもつなげて取



り組ませていく。児童は、「去年はナスを育てたから、今年はスイカにする。」や「去年はシシトウがたくさん収穫できたから、今年はキュウリを20本以上収穫したい。」など、自分なりの目標を立てて栽培活動に取り組み、「水やりは大変だ。」と言いながらも、夏野菜の成長と収穫を喜んでいた。

9月からは、学年ごとに割り当てた冬野菜の栽培を始める。これは、11月に保護者や日頃からお世話になっている地域の方を招待して開催する「ふるさとふれあい収穫祭」に向けての栽培である。学年ごとの割り当ては、右のとおりである。児童は、自分たちが栽培した作物で作るご飯とだんご汁のおいしさを知っているのので、毎年熱心に冬野菜栽培に取り組んでいる。また、収穫祭での保護者や地域の方からの「今年もおいしかったよ。」という称賛の言葉も冬野菜栽培への励みになっている。

##### 冬野菜栽培の学年割り当て〈資料2〉

- 1年生 白菜、ごぼう
- 2年生 小麦（1年生時から）
- 3年生 春菊、大豆
- 4年生 人参、水菜
- 5年生 米（春から）
- 6年生 大根、カブ
- 全学年 サツマイモ、里芋

##### (3) 5年生による田植え（6月）、稲刈りと脱穀（10月）、しめ縄作り（12月）

5年生は、この収穫祭に向けて米作りを行う。種籾から育苗し、田植え、稲刈り、脱穀の全てを児童が行っていく。

平成27年度は、JICAの海外視察団が本校の環境活動の視察に来られたので、一緒に田



植えを行った。そして、地域の方も交えて視察団との意見交流会を行った。児童は、「他の国の人々が、自分の国でも田植えをしたことがあるということを言っていたので驚きました。アフリカでも米が作られていることを初めて知りました。」と、新たな発見をすることができた。

10月になると、地域の方に学びながら稲刈りを行う。地域の方は、「鎌で指を切らないように、親指を上に向けて稲を握るといいよ。」とアドバイスをしてくださり、児童はけがをすることなく、上手に稲を刈っていった。そして、



刈り取った稲は、軒下で陰干しし、2週間後に脱穀を行った。児童は、この活動を通して「稲の中にお米がきちんと育っていて嬉しかった。」や「今年もたくさん収穫できたのでよかった。」という感想をもった。

12月になると、稲藁を使って地域の伝統文化であるしめ縄作りに取り組む。毎年、地域の方が南天の実やみかん、ウラジロ（シダの葉）を持参し、作り方を指導してくださっている。

活動後、児童は「昔から伝わっているしめ縄作りができて、よかった。」や「自分の家に飾って正月を迎えたい。」など、伝統文化に触れた喜びを感想文に記していた。



(4) 全校児童によるサツマイモの苗植え（6月）、イモ掘り（10月）

6月、全校児童によるサツマイモの苗植えを行う。この活動も地域の方に学びながら活動を進めていく。児童は、新芽をどの方向に向け、つるをどれだけ土に埋めるのかを助言してもらいながら苗を植えていった。また、2年生の麦刈りで残った麦藁も、雑草除けとして畑に敷き詰めていった。そして、10月に、本校児童だけでなく、地域の方をはじめ、異校種間の交流活動として特別支援学校の児童を招待してイモ掘りを行った。



(5) 全校児童と保護者、地域の方による「ふるさとふれあい収穫祭」（11月）

地産地消の農園活動の集大成として、「ふるさとふれあい収穫祭」を開催する。この取組は、児童が栽培・収穫した冬野菜や、小麦、米、サツマイモなどを食材に、保護者や地域の方と一緒にご飯炊きとだんご汁作りに取り組み、体育館を会場にして会食会を行うものである。

調理作業は、例えば、1、2年生が小麦粉でだんごを作り、5年生が羽釜でご飯を炊くというように、各学年ごとに割り当てて活動に取り組んでいく。そして、体育館を会場にして学校・保護者・地域が一堂に会し、会食会を行う。その会食前には、児童が農園活動で学んだことや収穫祭への思いなどを保護者や地域に発信する場を設定する。



児童は、「夏の暑い日に、毎日水やりをしたことは大変だったけれど、トマトが大きく育ったから嬉しかったです。」や「自分たちでお米を育てることに不安があったけれど、たくさんの地域の方が教えてくれたので稲も大きく実り、今日の収穫祭でご飯を炊いて食べることができます。地域のみなさん、ありがとうございました。」「野菜はあまり好きじゃないけれど、今日のだんご汁は、自分たちで作ったのでがんばって食べます。」など、大地の恵みや地域の方への感謝とともに、自らの生活の在り方を追究する発言をしていた。本実践のねらいに、児童自らが向かっていったのである。

(6) 6年生によるたくあん作り（12月）

収穫祭で、本校の地産地消の取組は一区切りを付ける。しかし、農園活動は12月以降も続く。その1つが6年生によるたくあん作りである。

本校区にある市民センターでは、毎年「漬物コンクール」が開催され、多くの地域の方が自前のたくあんを出品している。ここに本校の6年生児童も参加し、手作りたくあんを出品するとともに、地域の方に販売もする。そして、販売で得た収益金は、東日本大震災で被災した岩手県の小学校に復興のエールとともに義援金として贈る。

この取組を通して、児童が地域の一員としての自覚や、ふるさとへの愛着をもち、地域の伝統であるたくあん作りを継承するとともに、指導して下さる地域の方への感謝の心を育成することができるようする。さらに、ふるさとへの愛着をもって復興に向けた努力をしている岩手県の小学校や、今年度は熊本県の小学校にも復興のエールを贈ることで、自らのふるさとへの愛着をさらに高



めることができるようにする。そのためたくあん作りである。

9月に大根栽培を始め、12月に収穫と天日干し、そして樽漬けて1月に完成させるという中期的なスパンで活動を進めていった。



児童は、天日干しまでの活動で、「大根を400本も収穫できて嬉しかったけれど、それを水洗いするのは大変でした。」や「地域の方もたくあんを作るとき、一人で水洗いしているのだから、冷たくて大変だろうなと思いました。」など、体験からの実感のこもった感想を述べていた。また、市民センターでの販売活動でも、「地域の方は僕たちが作ったたくあんを楽しみにしていて、たくさん買ってくれたので嬉しかったです。」や「たくあん販売の時、復興への義援金をお願いすると募金にも協力してくれました。すがお地域の方の温かさを感じました。」という感想をもった。児童は、自分たちの取組に協力してくれた地域の方への感謝の気持ちと、ふるさとへの愛着と誇りを高めることができたのである。



### (7) 3年生による味噌作り（12月）

「ふるさとふれあい収穫祭」は、すでに前年度から準備がスタートしている。その1つが、3年生による味噌作りである。7月に大豆の種をまき、11月に収穫と天日干しをし、12月に味噌作りの仕込みをする。

児童は、大豆を栽培する過程で、成長途中で収穫すると、枝豆として食べられることや、実が3個入っている房が一番多いこと、房には産毛がいっぱい生えていることなど、様々な発見をすることができた。また、仕込み作業でも、地域の方に学びながら、大豆を小さくつぶしたり、それをだんごに丸めて樽に詰めたりすることを体験的に理解することができた。



そして数ヶ月後、熟成した味噌の味見をして、手作り味噌の完成を喜び合った。今年度の「ふるさとふれあい収穫祭」で食べるだんご汁の味噌は、今年の4年生が昨年度の12月に仕込んだものである。毎年、保護者や地域の方は、その味を楽しみにされている。

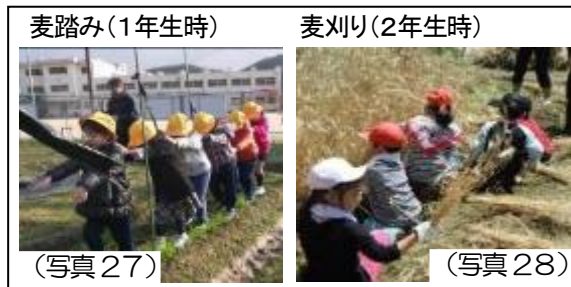
この学習活動を通して、児童は「大豆がたくさん収穫できたので、味噌作りだけでなく豆腐作りやきな粉作りにも挑戦したい。」や「味噌を自分たちで作られるか心配だったが、地域の方に教えてもらいながら作ることができたので、よかったです。」などの感想を述べた。児童は、大豆を使った食品への興味・関心を高め、味噌を自分たちで作ることができることを実感したのである。

### (8) 1年生による麦植え（12月）と、2年生に進級しての麦刈り（6月）

小麦の栽培も、収穫祭に向けて、1年前の12月から準備がスタートする。種植えと麦踏み、そして2年生になっての麦刈りである。種植えから1ヶ月経つと、葉も10cmほど伸び、麦を強く成長させるために麦踏みを行った。児童は、最初はかわいそうという気持ちをもって、ゆっくりと麦を踏んでいた。しかし、その様子を見ていた地域の方から、「元気な麦に育てるためには、一度踏まれ、立ち上がって成長させることが大事なのだよ。」と教えていただき、1列に並んで元気

に麦踏みを行った。そして、2年生に進級し、大きく成長した麦を刈ることができた。

麦刈り後、児童は「鎌で麦を刈るのは大変だったけれど、たくさん刈ることができたので、うれしかったです。早く収穫祭で、おいしいだんご汁を作りたいです。」と感想を述べた。自分たちで栽培、収穫を行ったことで、小麦への愛着が強まり、収穫祭に向けての意識も高まったのである。



## 5 成果

本実践では、年間を通じた様々な地産地消の農園活動で、地域の伝統文化を継承するとともに、大地の恵みと地域の方への感謝の心を育成することを目指して取り組んできた。そして、大きな成果を上げることができた。それを以下に述べる。

### (1) 食習慣の改善

児童が野菜の成長を見守り続けながら栽培・収穫を行ったことで、苦手な野菜に対するの食わず嫌いや偏食を減らすことにつながり、ほとんどの児童が「だんご汁の野菜がおいしい。」と言いながら進んでおかわりをして食べていた。また、日常の給食でも野菜メニューを完食することができるとなった児童を増やすことができた。

### (2) 地域や社会に向けた意識の高揚

栽培活動や収穫祭に向けた準備・実施等でリーダー、サブリーダーを務めた5、6年生児童を対象に地域への関心に関わる意識調査を実施すると、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」や「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」などで、肯定的な回答をした児童の割合が90%以上となった。

### (3) 地域の一員としての自覚

「ふるさとふれあい収穫祭」は、新聞にも取り上げられ、記事を読まれた地域の方からは、「収穫祭に招待していただき、ありがとうございました。新聞にも載っていましたね。子ども達は、すがおの宝ですよ。」と、温かい言葉をいただくことができた。そして、このことを児童に伝え、「僕たちは、本当に地域の人に支えられているんだね。」や「私たちも、すがおのために、がんばっていかないといけないね。」と、地域の一員としての自覚を意識した発言をするまでになった。



以上、児童は地域の「ひと・もの・こと」に学びながら大地と触れ合い、その過程でふるさとすがおへの愛着とともに、大地の恵みや地域の方への感謝の心を育成し、未来を切り開こうとする自らの生活の在り方を追究していった。そして、食習慣の改善のように苦手なことでも克服しようと努力したり、地域へのかかわり・つながりを尊重して行動したりすることができるまでになった。

まさに、「持続可能な社会の構築に向かう実践力」を高めることにつながることができたのである。

## 6 今後の課題

本校の農園活動をさらに充実させることができるように、栽培したサツマイモのつるや学校敷地内の樹木の落ち葉などから堆肥を作って肥料にするなど、自然循環型の環境保全活動にも地域と一体になりながら取り組んでいく。このことが、今後の課題である。

### 《 参考文献・資料 》

・多田孝志 共著 「未来をつくる教育 ESDのすすめ」	日本標準	2008年
・生方秀紀 共著 「ESDをつくる」	ミネルヴァ書房	2010年
・公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行「ひろがりつながるESD実践事例101」		2012年
・公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行「ユネスコスクールESD優良実践事例集」		2014年